

ごあいさつ



「歴史は未来のためにある」

私達NPO法人雲井龍雄顕彰会は、全国の多くの方々から支援を受け雲井の菩提寺である常安寺に2023年春銅像を建てる事が出来ました。建立後、日本各地から雲井ファンや詩吟愛好会の人々、また地元幼稚園の子供達の遠足等で賑わっています。

今年「幕末の米沢」というTVで雲井が取り上げられました。その中で米沢市民へ「雲井龍雄を知っていますか」というインタビューに多くの方が知らないという返答でした。彼は明治始まって最初の政府転覆を図った政治犯で、打ち首の後さらし首になった事から、米沢では彼の存在自体を隠すことになったからです。そして、彼を知っている人たちも高齢になりつつあります。そんなことから、私たちの会では幕末有数の憂国の士、そして魂の詩人・雲井龍雄を次世代、とくに地元の小・中・高校生に知ってもらうために本を作ることにしました。数多くの方に原稿を依頼し、写真やキャラクターのイラストも取り入れながら発刊をすることが出来ました。

幕末、一部の権力者により西洋一辺倒になり、日本の文化や魂が消えていきました。雲井は美しき日本を残すため新しい型の明治維新を創ろうとした憂国の士です。

私達は彼の志を後世に伝えて行きたいと思えます。

NPO法人雲井龍雄顕彰会
理事長 屋代 久

目次

ごあいさつ	屋代 久	2
雲井龍雄の生涯	遠藤 英	3
会津と雲井龍雄	笠井 尚	8
雲井像で「未来の大丈夫」を	安部 三十郎	9
相関図		10
雲井龍雄の史跡		11
詩魂		14
雲井龍雄の研究・小説		16
雲井龍雄の生涯と幕末維新をめぐる年表		18
私の雲井龍雄		20
私と雲井龍雄 -銅像制作を終えて-	新井 浩	24
編集後記	上泉 泰	30

雲井龍雄の生涯

遠藤 英



昭和41（1966）年米沢生まれ。米沢市在住。東北大学文学部史学科卒

九里学園高等学校教諭（地歴・公民科（社会科））

科目：日本史探究、歴史総合、政治経済、公共

著書：『直江兼続の素顔』、『直江兼続がつくったまち米沢を歩く』、『上杉鷹山の訓え ー明るい未来を拓くためにー』、『山形県の歴史散歩』（共著）

年に数回は外部の依頼を受けた講演

年に一度の山形大学工学部での講義

少年時代

雲井龍雄 [くもいたつお] は天保15（1844）年に米沢で生まれた。8歳になって私塾で学び始めた龍雄だったが、学問にはさほど身が入らず、わんぱくな子ども時代を送る。負けず嫌いだと言い訳はせず、まっすぐで嘘をつかず約束を曲げない性格は、塾の子どもたちから好かれていた。10歳の頃には学問にも打ち込むようになり、夜に書物を読んでいて眠くなると眠気を払うため頭を棒で叩くので、頭はこぶだらけだった。

米沢には上杉謙信以来の「上杉の義」の気風がある。謙信の「筋目を通す」ことを重んじる生き方である。そのような環境で、龍雄のまっすぐで嘘をつかない性格は大切に育まれていった。また米沢では、とくに上杉鷹山以来、社会の問題を解決するのは学問であると考えられていた。学問に熱心に取り組むようになった龍雄の中に、より良い社会の実現のために自分の身を捧げる強い意志が育まれていったことだろう。

負けず嫌いで言い訳もしない龍雄からは、自分の考えに自信を持てる自立心の強さがうかがえる。国学者・本居宣長 [もとおりのりなが] は、生まれたままの心（真心という）を正しいと信じて神の御心のままに生きる（惟神 [かんながら] の道という）ことが、日本人本来の素直でおおらかな性質であると言っている。このような人間は、自分を否定したりせず自分らしく行動できる。龍雄はとても日本的で、自立した生き方をする人物であった。

幕末の動乱

文久3（1863）年、米沢藩主・上杉斉憲 [うえすぎなりのり] は14代将軍・徳川家茂 [とくがわいえもち] のお供として京都に上り、そのまま米沢藩が京都の警衛を任せられた。そして8月18日、薩摩藩 [さつまはん] と京都守護職の会津藩 [あいづはん] が米沢藩を巻き込んで、京都御所にいた長州藩 [ちょうしゅうはん] 勢力を追放（八月十八日の政変）。ここから薩摩藩と長州藩の争いがはじまり、米沢藩は幕府・朝廷、薩摩藩・長州藩・会津藩をめぐる幕末の動乱に引き込まれていく。翌年7月には長州軍が京都御所を襲撃（禁門の変・蛤御門の変）したため、米沢藩が京都を守るために活躍。長州藩は「朝敵」（朝廷・天皇の敵）となり、幕府軍が長州藩を攻撃（第一次長州征伐）。翌慶応元（1865）年にも第二次長州征伐が行われることが決まり、米沢藩は江戸での情報収集の必要性に迫られた。

雲井龍雄の生涯

このころ龍雄は江戸から書物を取り寄せて勉学に励んでいた。だから、米沢藩に江戸での情報収集（探索）と藩のための活動（周旋）の役目を命じられたときには、喜んでこれを受けた。このとき龍雄は数え年22歳（満21歳）であった。

三計塾 [さんけいじゅく]

慶応元年（1865）江戸に到着した龍雄は、すぐに有名な儒学者 [じゅがくしゃ] ・安井息軒 [やすいそっけん] の三計塾に入門した。当時の社会学の中心は儒学である。古代中国の孔子によってはじめられた儒学は、社会全体を家族と考え、家族のような理想的な社会を築くことを目指すものである。中国では儒学が社会ルール・規範として発展したが、日本では道徳として定着していた。現代の「社会道徳・マナー」もこの儒教道徳にもとづいている。息軒は、日に日に強まる外国からの圧力に対し、日本人が天皇や将軍のもとで家族として団結し、その上で西洋の軍事技術・制度を学ぶべきだと教えた。日本人が団結しないうちに学ぼうとすれば、たちまち西洋の制度や文化が入り込んで日本の良さが失われ、この国は日本ではなくなってしまう。この考えは、龍雄の考えと同じであった。三計塾の門下生の中には、のちに明治政府で活躍するメンバーもたくさんおり、同期生には龍雄と同様に探索・周旋の役目を務める他藩の藩士もいた。三計塾でつくられた人脈は、龍雄にとって大きな財産となった。こうして龍雄は多くの情報を手に入れていった。

龍雄が米沢に戻った直後の慶応2（1866）年6月に始まった第二次長州征伐は、8月に幕府軍の敗北で終わった。その間、将軍・徳川家茂が大坂城の陣中で没し、さらにその年の12月には孝明天皇も37歳の若さで崩御し、わずか16歳（満14歳）の明治天皇が即位した。混乱の中心は京都・大坂に移っていくことになる。

薩長連合による討幕

幕府の第二次長州征伐敗北の要因の一つは、薩摩藩の裏切りだった。はじめ薩摩藩は、「朝敵」長州藩に対して朝廷・幕府・会津藩と結束していた。しかし薩摩藩と長州藩に「イギリス海軍と戦った」という共通点が生まれていた（薩摩藩は薩英戦争、長州藩は四国艦隊下関砲撃事件）。薩摩藩と長州藩は、互いが争うよりも外国から日本を守ることが大切と考えるようになり、手を組んだのである（薩長同盟）。そのため薩摩軍は第二次長州征伐に協力せず、幕府軍は長州軍に撃退されたのであった。15代将軍となった徳川慶喜 [とくがわよしのぶ] は慶応3

（1867）年10月、政治権力を天皇に返上した（大政奉還 [たいせいほうかん]）。これに先だって京都に天皇を中心とする新政府が誕生し、米沢藩は探索のために急いで龍雄を京都に派遣した。



京都御所

雲井龍雄の生涯

しかし、龍雄が慶応4年（1868）正月、一時的に京都を離れ江戸に行っていた間に、京都では大変なことが起きていた。会津藩兵ら旧幕府勢が、京都南方の鳥羽・伏見〔とば・ふしみ〕において薩摩軍・長州軍（新政府軍）と衝突したのである（鳥羽・伏見の戦い）。今度は徳川慶喜・会津藩が「朝敵」とされ、戊辰戦争が始まった。新政府は米沢藩にも会津藩を討伐するよう命令した。

京都に入った龍雄は、新政府によって藩を代表する貢士〔こうし〕（議事所の下院議員）に任命される。龍雄はそこで急速に人脈を広げて情報を集めると、会津藩征討をめぐって意外にも新政府の中心となる薩摩藩・長州藩・土佐藩など諸藩の足並みが揃っていないことがわかってきた。幕府を裏切った薩摩藩が日本国内を混乱させて新政府を操っていると考えていた龍雄は、薩摩藩を孤立させ無力化しようと考えた。長州藩や土佐藩にいる三計塾の門下生たちと話し合い、薩摩藩から離れるように促すのである。

一方、米沢藩が探索のためにもう一人京都に派遣していた宮島誠一郎は、会津藩を助けるために活動していた。そして、鳥羽・伏見で新政府軍と戦ってしまった会津藩は、政府に謝罪し従う必要があると知った。合わせて誠一郎は、東北諸藩が協力して新政府に歎願〔たんがん〕し、会津藩を許してもらおうと考えた。

しかし、4月11日に徳川慶喜が江戸城を開城すると、新政府は改めて米沢藩に会津攻撃を命じたのである。龍雄と誠一郎はこれに対応するために、急いで米沢に戻っていった。

討薩之檄〔とうさつのげき〕

龍雄は、薩摩藩から長州藩・土佐藩をうまく切り離せなかったことから、米沢藩を動かして東北諸藩の軍事力を結集し薩摩藩を倒そうと考えた。まっすぐな性格の龍雄は、薩摩藩に謝って許しを乞うのではなく、日本を乱す薩摩藩を倒すことで正しい結果を導き出そうとしていた。米沢に戻った龍雄は藩の命令で、すでに新政府軍との戦闘が始まっていた新潟戦線に向かう。6月10日、会津軍の本陣が置かれていた加茂〔かも〕（加茂市）に到着。そこには米沢藩・仙台藩などの呼びかけで東北地方・新潟の31藩が結成した奥羽越列藩同盟〔おううえつれっぱんどうめい〕の指揮官たちも集まっていた。龍雄は、薩摩藩を倒さなければならない理由を共有して足並みを揃える必要があると訴え、「討薩之檄」を書き上げた。詩文の才に秀でた龍雄の「討薩之檄」は、古今東西の檄文（広く主張を伝えて人々の同意を求め、急いで人々を呼び集めるための文書）の中でもとくに名文と言われている

（本書14ページ）。



雲井伝説が残る南会津の宿にある書

雲井龍雄の生涯

檄文はすぐに会津藩・長岡藩に共有され、新政府側の大垣藩（岐阜県）・加賀藩（石川県）にも送られた。龍雄は長州藩の参謀にもこれを送り、米沢藩は庄内藩・長岡藩・仙台藩・会津藩と協力して横浜に入港する諸外国にも同様の布告文を届けた。

その後、龍雄は上野国〔こうづけのくに〕（群馬県）に向かった。東北地方に攻め込む新政府軍の背後をかく乱する準備である。各地から支持者が合流し、その中には道中で出会った元新選組〔しんせんぐみ〕隊士・永倉新八〔ながくらしんぱち〕（30歳）もいた。龍雄は同志を6人選び、8月29日に米沢に戻る。同行した永倉らは龍雄の家近くの花岳院〔かがくいん〕に滞在し、2カ月に及ぶ生活の面倒は龍雄の妻よしが見ている。

しかし、龍雄が関東にいる間に新潟を守っていた上杉軍（米沢藩）が敗れ、二本松（福島県）に布陣していた土佐藩の板垣退助が米沢藩に降伏を勧告。主戦力を失った米沢藩は降伏するしかなく、上杉斉憲は9月1日付け降伏状を新政府に提出する。龍雄が米沢に戻った8月29日とは、まさにそんな時であった。日本全体の未来を憂う龍雄は、米沢藩が薩摩藩を中心とする新政府に降伏したことを怒ったが、その後9月15日には仙台藩が降伏、福島藩・上山藩・山形藩・天童藩も次々と降伏し、19日には会津藩も降伏、23日の庄内藩の降伏によって奥羽越列藩同盟は消滅した。

最後の闘い

明治2（1869）年8月、東京に出た龍雄は安井息軒のもとに身を寄せ、再び活動し始めた。新政府はこれを警戒したので、三計塾の旧友で集議院議員の稲津濟〔いなづいつき〕が龍雄を集議院寄宿生に任じて守ってくれたが、龍雄は自分の安全よりも活動することを優先し、1カ月弱で集議院寄宿舎を出ている。自由の身となった龍雄のもとには協力者や来訪者が集まった。来訪者にはかつての同志の他、新政府に不満を持つ者たちもいた。明治3（1870）年2月、龍雄は「帰順部曲点検所」の標札を掲げて政府に歎願書を提出する。それは、龍雄の部曲下の1300人と奥羽越列藩同盟の他の部曲下の約7000人について、戊辰戦争の罪を許して天皇の親兵〔しんぺい〕にしてほしい、彼らを旧藩に強制送還することはやめてほしい、というものだった。日本のために志を持ちながら不遇な状態に置かれた憂国の志士たちを救うとともに、政府軍（親兵）の中に同志を増やして、チャンスがあれば武力蜂起して薩摩勢力を政府から追い出すつもりだったのだろう。



奥羽越列藩の旗
（宮坂考古館所蔵）

雲井龍雄の生涯

しかし政府は、4月29日に龍雄の歎願を正式に却下、5月14日に龍雄は身柄を拘束されて米沢に護送される。龍雄を東京から引き離れた政府は、残った同志たちの取り調べを始めて龍雄の罪の証拠を手に入れようとした。結局、反逆罪の十分な証拠はつかめなかったが、それなりの情報・証言を得たことで龍雄を東京に呼び戻す。龍雄は小伝馬町（東京都中央区）の獄舎に入れられて尋問を受け、12月28日に死刑・さらし首の判決が下された。その日のうちに獄舎内で刑を執行、その首は小塚原（東京都荒川区）にさらされた。刑執行を務めた山田吉亮は、顔色一つ変えず平然と落ちていて刑の執行に臨む龍雄の姿に「敬服」を覚えたと回想している。

その後の日本

翌明治4（1871）年7月、廃藩置県〔はいはんちけん〕が行われてすべての藩が消滅すると、中央政府の組織は一新され、薩摩・長州を中心とする藩閥政治〔はんぱつせいじ〕が姿を現した。龍雄がもっとも恐れていた薩摩による専制政治の兆しであった。これに対して政府に加わっていた土佐・肥前藩閥の官僚・軍人約600人が一斉に政府を辞職すると（明治六年の政変）、全国各地で薩長藩閥政府への反抗がはじまった。板垣退助ら旧土佐藩は薩摩・長州の藩閥政治に対抗して民主政治を実現するために、自由民権運動を始める。そのとき、各地に急速に広がる運動を進めた壮士たちが愛唱したのは、雲井龍雄の詩であった。民権運動が激化しはじめる明治14（1881）年、谷中（東京都台東区）に龍雄の墓碑が建立される。発起人の山下千代雄は米沢出身の若者で、龍雄が東京に護送されたときに、そのそばに付いて米沢郊外まで見送った少年であった。山下は政府内の薩摩・長州藩閥を打破することで龍雄の霊にやすらかに眠ってほしいと、民権運動に身を投じていく。

帝国議会（国会）開設を前に明治22（1889）年に大日本帝国憲法が公布されると、雲井龍雄は恩赦によってその罪が解かれた。これ以降、政府内や学界から龍雄を評価し、その死を惜しむ声が上がりはじめる。龍雄が守ろうとした日本の伝統的な秩序・道徳も、明治天皇が信頼を寄せる儒学者・元田永孚〔もとだながざね〕によって政治や教育界において復活されて、西洋型近代国家の枠の中に日本人の価値観が守られることになった。経済界においては、『論語と算盤〔そろばん〕』を著した渋沢栄一によって、儒教道徳を尊重する日本型資本主義が実現した。

日本国の存亡の危機を乗り切るために急速な近代化が求められた明治維新期において、やむをえず薩摩藩の性急な改革を受け容れた多くの人たちも、その奥には龍雄に共感する日本人の心があったのだろう。しかし、不確かな未来を前に襲いかかる圧倒的な不安は、激しい動乱の中で日本人本来の大切なものを見失わせようとする。その中で純心に叫び続けた雲井龍雄の声は、敵・味方の違いを越えて心に響いていたに違いない。その一途で愚直な行動力は新政府が進める近代化の障害となったが、龍雄がこの世を去った後のさらなる近代化・民主化を鼓舞したのは龍雄の詩であった。雲井龍雄が守ろうとしたものは、彼が死してなお人々の中に生き続け、現在に至っている。近年、欧米の人々から日本人の道徳心や他者を思いやる性質、日本社会の秩序などが称賛されているが、これこそがまさに近代化・西洋化にあらがって龍雄が守ろうとした「日本」であった。

明治19（1886）年、米沢を訪れた永倉新八が龍雄の家を訪ねている。新八は未亡人よしと、雲井龍雄の思い出を語り合った。

会津と雲井龍雄



笠井 尚

1952年生まれ。喜多方市在住。郷土史家。主な著書に『山川健次郎と乃木希典』（長崎出版）『白虎隊探究』『会津人探究』（ラピュータ）『土俗と変革』（論創社）など。

吉田松陰と並び評される革命家雲井龍雄は会津を見捨てませんでした。薩長などからスケープゴート（身代わりの犠牲者）にされた会津に加勢したのです。会津藩士とも深い交流がありました。原直鉄とは心を許し合う同志でした。

薩長ではなく、奥羽越の諸藩によってもう一つの明治維新が成就していたならば、日本の歴史は大きく変わっていた可能性があります。龍雄について語ることは、急激な近代化の中で見失ってしまった、日本人の大切なものを再確認することでもあります。

日本のナショナリズムにこだわり続けた竹内好（よしみ）の言葉を、私たちはかみしめる必要があります。竹内は「近代市民を出発点にして革命のコースをえがくことはできない。伝統の影を持った庶民の、うしろ向きの暗さの底をかいくぐって、そこからエネルギーを引き出すのでなければ、革命は成らないであろう」（『国民文学論』）と書いていたからです。

龍雄は欧米一辺倒とは違った明治維新を目指したといわれています。龍雄が会津に味方したのは慶応三年十二月九日、薩長による大義なきクーデターに反発したからです。それ以前に幕府は朝廷への大政奉還（たいせいほうかん）を受け入れていたにもかかわらず、王政復古の号令をかけ、徳川追討、会津・桑名討伐の密勅（みっちよく）が出されました。

これに反発した龍雄は、安井息軒の三計塾の先輩である土佐の後藤象二郎や長州の広沢真臣と直談判をしました。あまりにも痛烈に批判したために、龍雄は命を狙われることになり、それで京都を離れ江戸に向ったのです。以前から米沢は長州と深い付き合いがありましたから、長州と薩摩とを分断しようとしたのですが、言論では解決が付かないことが判明したので、武力によって倒そうとしたのです。

龍雄が奥羽越列藩同盟のために「討薩檄」を起草したのは、会津を救うためでした。龍雄は同志を引き連れ、北関東で味方を募るために南会津から上州（群馬県）に入りました。沼田において前橋・小幡の兵に襲撃され、九死に一生を得たのでした。そして、会津が攻められているにもかかわらず、米沢が先に降伏したことに異を唱えるなど、敗者となった会津の側に立ったのです。

明治の初めには全国的に不穏な動きがありました。旧士族の救済策として「帰順部曲点検所」を設立しますが、武力蜂起を計画していたことが露見し、龍雄は叛乱首謀者として小伝馬町で斬首されました。明治三年十二月二十六日のことです。それに加担したとして、旧会津藩士であった原直鉄、築瀬勝吉、能見武一郎も斬罪の刑を執行されました。原らの会津藩士も龍雄と運命を共にしたのです。

雲井像で「未来の大丈夫」を

安部 三十郎

1953年生まれ。米沢市在住。元米沢市長



「置かれた所で咲く」という言葉があります。その究極の例が雲井龍雄だと思っています。無理やりに「置かれた」斬首の場。しかし、首を打った山田浅右衛門（吉亮）が敬服して、後々までその様子を語り伝えるほど、立派な最期を遂げました。そして、その後に興った自由民権運動において、志士たちは好んで彼の漢詩を吟じ、自らを鼓舞しました。

一昨年、NHKの「映像の世紀」で、チェコスロバキアにおける民主化運動（ビロード革命）の経緯を知りました。民衆の心を鼓舞したのは、アメリカの、そしてチェコのロック・バンドの歌でした。今年1月に見た「映像の世紀」。ベルリンの壁崩壊に繋がる東ドイツ国民の自由・民主化運動を鼓舞したのも、やはり一人の詩人・歌手の歌でした。

「国のルール」なき薩長藩閥政治から、ルールのある国民政治への転換を図るべく、憲法制定、国会開設を求めて高揚する自由民権運動。その運動を熱血の詩（うた）によって鼓舞した雲井龍雄は、死してなお、置かれた所で十分に咲いたのです。

雲井がこのような生き方をした基礎は、どこにあったのでしょうか。江戸時代、武士の学問は儒学でした。その儒学の經典の一つが「孟子」です。孟子に有名な一節があります。真の大丈夫とは何かを説いた文章です。丈夫は男の意ですから、大丈夫は男のなかの男、立派な男ということになります。

中国史学者・貝塚茂樹氏による訳文を、著書から抜粋して紹介します。「天下をひろい住居として、天下の真中に立って、天下の大道を歩む。目ざす地位を得れば、人民とともに道を実現し、目指す地位が得られなければ、自分ひとりで道を実現する。富貴にも迷わされず、貧賤にもくじけず、威武をものともしない。こういうのがほんとうの大丈夫なのである」（「人類の知的遺産 孟子」講談社）

雲井は当然この一節を、おそらく少年時代の、しかも早い時期に学んだはずですし、学んだだけでなく実践したのです。

数年前、政治家・官僚における「付度」行為が社会問題視されました。最高権力者の汚職疑惑を糊塗し、自らの保身を図るべく、権力に連なる人たちが行った犯罪です。その付度する人々の真逆を行くのが、権威・権力におもねることのない大丈夫です。

今年の夏の終わりに、「荒野に希望の灯をともし」という映画を観ました。アフガニスタンにおいて、人々の病気と貧困を救うべく、大河から水を引き入れた灌漑用水路を建設し、荒野化した土地を再び緑の沃野に変えた日本人医師・中村哲氏のドキュメンタリーです。

中村氏は当初から、地位を得て道を実現しようとは全く思わず、独りで立ち上がり、賛同する人々と一緒になって道を実現したのですから、さらなる大丈夫と言えます。

社会が健全な発展を遂げるには、大丈夫の存在が不可欠です。雲井龍雄の銅像建立と顕彰活動は、「未来の大丈夫」を生み出す弾みになると信じています。（令和6年11月）

雲井龍雄の史跡



2023年5月、常安寺境内にNPO法人雲井龍雄顕彰会によって建立されました。銅像制作者は福島大学の新井浩教授、揮毫は鈴木不倒氏です。

雲井龍雄の史跡



首塚（常安寺 米沢市城南5-1-23）

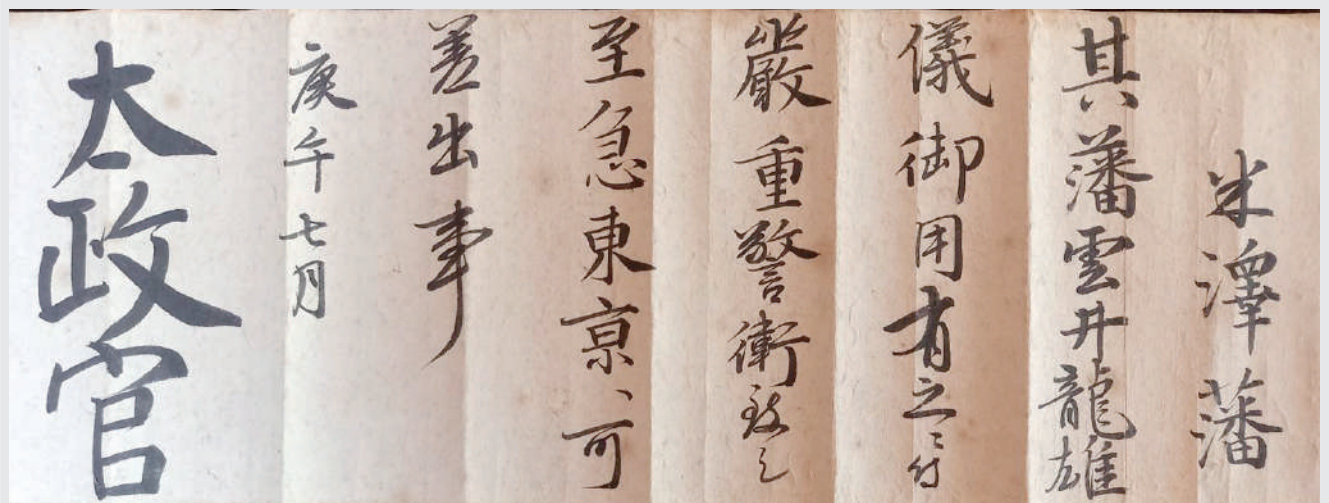
常安時にある首塚は、明治に龍雄の頭髪を埋葬した米沢初めての墓です。

龍雄の実家小島家で祀られています。

雲井龍雄の墓

（常安寺 米沢市城南5-1-23）

昭和5年雲井会により、東京谷中の墓地より首を移し、新たに常安時に建てた墓。雲井会は、登坂又蔵市長を会長に米沢出身の300人による組織でありました。



太政官から米沢藩に龍雄の身柄を東京に送致せよという命令書です。非常に貴重なものです。（常安寺所蔵 米沢市城南5-1-23）

雲井龍雄の史跡



龍雄の墓（谷中霊園 東京都台東区谷中7-5-24）

東京谷中にある10万㎡を超える都内屈指の谷中霊園にある龍雄の墓。

非常に立派な墓で、徳川慶喜を初め渋沢栄一、横山大観、鳩山家、牧野富太郎、他有名人が多数埋葬されています。

詩碑（米沢法泉寺 米沢市城西 2-1-4）

これは、明治3年2月龍雄の親友、釈大俊が郷里の尾張で同志を募るため東海道を下る時、出発に際し餞けに送った詩です。揮毫者は上泉徳弥。



雲井龍雄の墓

（回向院 東京都荒川区南千住5-33-13）

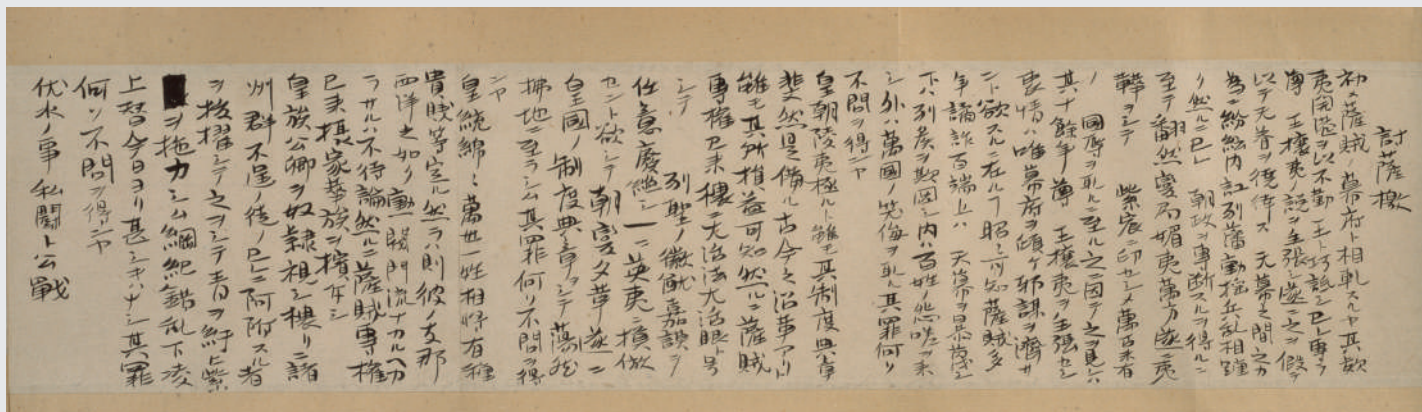
東京都墨田区にある回向院にある龍雄の最初の墓。この寺は、行路病死者や刑死者の供用のために開きました。小塚原で梟首された龍雄は近隣のこの寺に埋葬されました。またこの寺には、吉田松陰、橋本佐内、頼三樹三郎ら多くの志士たちが葬られています。

詩 魂

龍雄の詩

龍雄の詩は独学で、流派はありません。柔和な表面と異なり志士の闘魂だけでなく、政治的な情念と鋭敏な詩的感受性を持ち合わせていました。龍雄の作った詩や檄文は、人々を鼓舞し、魂の叫びが心を打ちます。だから時を超えて今も詩い継がれているのです。

討薩之檄 草稿（米沢市上杉博物館蔵）



口語訳

薩摩は、最初攘夷を主張して、幕府の開国を貶めて批判していたのに、自分が権力を握ると開国を主張し始めた。なんの一貫性もなく、当初攘夷を主張していたのは自分の野望を遂げるためであった。この罪を問わなくてはならない。日本には外国からの危機はあるといっても、日本固有の制度や歴史がある。しかるに、薩摩が専制権力を握ってから、あまりにも急激で無理な改革を推し進め、長い歴史の中で積み重ねられてきた制度や習慣を破壊している。その罪をどうして問わずにいられよう。薩摩は、公家や皇族を捨て去り、自分の意に沿わぬ者は排斥し、諸国の得たいの知れない人々の中で、自分たちにつき従うものばかりを出世させて取り立て、下剋上の綱紀齟乱の世を招いている。その罪を問わずにはいられない。鳥羽・伏見の戦いも、もし本当に正当な戦争を起こそうとするならば、天下の公論を定めて、罪を明らかにしてから起こすべきなのに、急に錦の御旗を利用して策謀によって幕府を朝敵に陥れて戦争を起こし、諸藩を脅迫してさらなる戊辰戦争に駆り立てている。これは、天皇の意思を自分勝手にコントロールして私怨を報いようとしている邪な謀略だ。その罪を問わなくてはならない。薩摩の軍隊は、東日本に侵攻して以来、略奪や強姦をほしいままにし、残虐行為は限りない。しかるに、官軍を名乗って、それを太政官の規則と称している。これは、今の天皇に暴君の汚名を負わせるものだ。その罪を問わなくてはならない。諸藩の、親子兄弟同士いろいろな大名たちを戦争に駆り立てている。そのことを、飾り立てた言葉で正当化しているけれど、これこそ最も残酷な道徳に反することだ。その罪を問わなくてはならない。以上のことから考えれば、薩摩のなすところは、幼い天皇を利用強制して邪悪政治をし、天下を欺き、残虐をなし、道徳を破壊し、長い伝統や制度を破壊している。奥羽越列藩同盟はこれを座視するに耐えないので、再三朝廷にその不当を訴えてきたが、天皇にはその旨は届かなかった。もし、手をこまねいて薩摩を討たなければ天下はどうして再び晴れることがあるだろうか。よって、勝ち負けや利害を問わずに、この義挙を主張する。天下の諸藩は、もし本当に忠や誠を持っているならば奥羽越列藩同盟に協力して、日本のために薩摩を倒し、失われた道義を復活させ、万民を塗炭から救い、外国からの侮りを断ち、先祖たちの心を安んじて欲しい。もし、薩摩に籠絡されて、何が正義かも弁えず、薩摩を助けるような邪悪な徒がいるならば、軍も規律があり、許すわけにはいかない。天下の諸藩は勇気ある決断をして欲しい。

詩 魂

述懐

述 懐

死 不 畏 死
 生 不 偷 生
 男 兒 大 節
 光 與 日 争
 道 之 苟 直
 不 憚 鼎 烹
 渺 然 一 身
 萬 里 長 城

不倒謹書



(辞世の詩)

死して 死を畏れず おそ

生きて 生を偷まず ぬす

男児の 大節 たいせつ

光 日と争う

道の いやしくも直ければ なお

鼎烹を 憚らず ていほう はばか

渺然たる 一身 びようぜん

万里の 長城

意識

(意識) 死に臨んでも死を畏れない いつも覚悟して 力いっぱい生きてきたから 志ある人間の掲げる大義の輝きは 太陽と争うほどだ 正しいと信ずる道を行くのなら 釜茹での刑にされても構わない 広くて果てしない世界の中の小さなわが身だが国を思う気持ちは 万里の長城の如しである

龍雄は若い時から結核で長く生きられないと意識して生きてきました。だから小意を捨て大意を称え胆力をもって走り去りました。

新しい国を作る想いは、誰しも止める事は出来ませんでした。

その志は現代にも引き継がれています。

雲井龍雄の研究書

ここに掲載したものは、雲井龍雄顕彰会が実際に購入し読んだものです。この他にもさまざまなものがあると思います。

1		『新稿 雲井龍雄全伝』 上巻（本篇） 下巻（資料篇・遺墨集） 安藤英男 著 光風社 出版（昭和56年10月） 雲井龍雄研究の白眉	9		『志士・詩人 雲井龍雄』 尾崎周道 著 中央書院 発行（昭和48年6月）
2		『東北の幕末維新 米沢藩士の情報・交流・思想』 友田昌宏 著 吉川弘文館 出版（平成30年11月）	10		『片品の民俗』 片品の民俗一群馬県 民俗調査報告書 群馬県（昭和35年8月）
3		『戊辰雪冤 米沢藩士・宮島誠一郎の「明治」』 友田昌宏 著 講談社現代新書 講談社 出版 （平成21年8月）	11		『幕末 非命の維新者』 掲載：第五章 三人の詩人 234頁 村上一郎 著 中公文庫 中央公論新社 発行 （平成29年9月）
4		『越後戊辰戦争と加茂軍議』 掲載：第三章 250頁 米沢藩士雲井龍雄の「討薩ノ檄」 稲川明雄 著 加茂商工会議所 発行（平成28年9月）	12		『奇傑 雲井龍雄の學源』 高橋 力 著 龍雄宣揚會 発行（昭和13年10月）
5		『郷土史の裏街道 架空座談会2』 掲載：152頁 維新史秘話 松野良寅 編著 上杉鷹山公と郷土の先人を 顕彰する会 発行（平成16年6月）	13		『雲井龍雄』 渡邊為蔵 著 民友社 発行（明治30年1月）
6		『奥羽越列藩同盟 東日本政府樹立の夢』 掲載：第三章 225頁 雲井梟首 星 亮一 著 中公新書 中央公論新社 発行（平成7年3月）	14		『白虎隊 異聞 雲井龍雄』 宮崎猛矩 著 中村書店 発行（大正15年3月）
7		『幻の明治維新 やさしき志士の群』 掲載：第三章 139頁、158頁 高橋義夫 著 創世記 発行（昭和52年11月）	15		『季刊 会津人群像 第37号』 掲載：99頁 雲井龍雄事件と太政官金札紙幣 歴史春秋出版 発行（平成30年8月）
8		『吉村昭 歴史小説集成 第7巻 雪の花』 掲載：588頁 梅の刺青 岩波書店 発行（平成21年10月）	16		『日本政治裁判史録 明治・前』 掲載：160頁 我妻栄 編集代表 第一法規出版 発行（昭和43年11月）

雲井龍雄の研究書・小説

17		『みちのく歴史物語 - 米沢を中心に -』 掲載：第六章 169 頁 雲井龍雄の処刑と 廃藩置県 田宮友亀雄 著 芳賀幸四郎 監修 遠藤書店 発行 (昭和 42 年 7 月)	23		『雲井龍雄の遺髪と頭骨の移送につ いて』 丸山 巖 著 (平成 22 年 2 月)
18		『米沢史談 第 3 集』 掲載：173 頁 討薩の檄 中村忠雄 著 置賜郷土史研究会 発行 (昭和 50 年 3 月)	24		『朝日ビジュアルシリーズ 藤沢周平の世界 No. 24 雲奔る』 朝日新聞 発行 (平成 19 年 5 月)
19		『郷土に光をかかげた人々』 掲載：105 頁 明治維新の志士 雲井龍雄 米沢児童文化協会 編 米沢児童文化協会 発行 (昭和 63 年 10 月改訂版)	25		『米沢風土記』 NHK ラジオ放送“郷土のしおり”から 米沢市編集 米沢市発行 (昭和 50 年)
20		『清瀧山 常安寺』 掲載：54 頁 雲井龍雄 常安寺檀徒総代 種村一郎、 29 世住職 漆山知道 発行 (平成 2 年 10 月)	26		『雄飛せよ龍雄の詩魂』 南陽市宮内岳鷹会 吟行 (令和 5 年 11 月)
21		『興讓館人國記』 掲載：第四部 228 頁 雲井龍雄 (小島龍 三郎) 松野良寅 著 米沢興讓館藩学創設 300 年記念事業	27		『戊辰戦役関係資料』 米沢市編さん委員会 編集 米沢市編さん委員会 発行 (昭和 56 年 6 月)
22		『特別展上杉茂憲 最後の藩主と米沢 士族』 掲載：18 頁 雲井龍雄墓碑 并 肖像 19 頁「小島龍三郎遺墨」、30 頁 中島 有斐自画像 (雲井龍雄の兄の顔)	28		『米沢市史 近世編 2』 第 4 章 628 頁 雲井龍雄の討薩の檄 米沢市史編さん委員会 編集 米沢市 発行 (平成 5 年 3 月)

小 説

29		『雲奔る』 藤沢周平 著 文春文庫 文藝春秋出版 (昭和 57 年) 「監車墨河を渡る」の文庫版	31		『謀殺された志士 雲井龍雄』 高嶋 真 著 歴史春秋社 出版 (平成 15 年 3 月)
30		『雲奔る』 藤沢周平 著 中公文庫 中央公論新社 出版 (平成 24 年 5 月) 「監車墨河を渡る」の文庫版	32		『雲井龍雄』 童門冬二 著 新人物往来社 出版 (昭和 49 年 3 月)

雲井龍雄の生涯と幕末維新をめぐる年表

西暦	和暦	雲井龍雄の生涯	日本の動き
1844年～ 1852年	天保15年～ 嘉永5年	3月25日米沢藩袋町に父 中島惣衛門、母八百（屋代家より嫁ぐ）の次男として生まれる。 8歳で近所の上泉清次郎に、9歳で山田蠖堂に、12歳で曾根俊臣に学び、14歳からは興讓館において優秀につき藩主から褒章を受ける。	日本周辺において外国船舶の出没が頻繁となる。 水戸藩を中心に尊王攘夷思想が草莽の士に広がる。 この後、幕府は公武合体に傾斜して開国に進み、薩長による倒幕・維新に至る。
1853年	嘉永6年		6月 海軍大将マシュー・ペリーが率いるアメリカ合衆国海軍東インド艦隊の艦船4隻が浦賀に来航し国書受取を要求。 この事件を起点として幕末の動乱の幕が切って落とされた。
1854年～ 1855年	安政元年～ 安政2年	山田蠖堂に師事する。	1月ペリーが再び江戸湾に来航、3月18日米和親条約を締結。
1858年～ 1859年	安政5年～ 安政6年	興讓館での学業秀逸につき表彰される。	井伊直弼が大老に就任し安政の大獄始まる。日米修好通商条約締結。
1860年	万延元年		勝海舟ら日米修好通商条約批准書交換のため咸臨丸でアメリカに渡航。 桜田門外の変。
1861年	文久元年	18歳で叔父 小島才助の養子となり丸山庄衛門の次女よしを娶る。	
1862年	文久2年	20歳で小島才助が死去し家督を継ぐ。 21歳の時、高島が警護の任につく。	坂下門外の変。 会津藩主松平容保が京都守護職となる。 皇妹和宮内親王降嫁。
1864年	元治元年		禁門の変 第一次長州征伐。
1865年	慶応元年	23歳 米沢藩江戸藩邸に出仕し安井息軒の三計塾に入門する。同塾には桂小五郎 広沢真臣、品川弥二郎 人見勝太郎らだったが非常に優秀で執事長（学生長）となる。	高杉晋作、長州藩の実権を掌握する。

雲井龍雄の生涯と幕末維新をめぐる年表

西暦	和暦	雲井龍雄の生涯	日本の動き
1866年	慶応2年	藩命にて米沢に帰国したが、米沢藩は家老千坂高雅を京都に派遣し、龍雄はその先駆として京都で探索活動に従事する。	徳川慶喜が第15代将軍に就任。 孝明天皇崩御し明治天皇が践祚（せんそ）。
1867年	慶応3年	10月大政奉還 12月王政復古の号令が発せられ、龍雄は新政府の貢士に挙げられた。	10月大政奉還、12月王政復古の号令が発せられる。
1868年	慶応4年 明治元年	鳥羽・伏見の戦いが始まり、新政府軍の東征が江戸、東北に及び、龍雄は京都を明治元年出て、奥羽越列藩同盟に奮起を促した。 越後加茂にて有名な「討薩之激」を草して同盟各藩に配る。 その後、会津函館と旧幕府勢力が破れ、新政府は権力を掌握する。	鳥羽・伏見の戦い、幕府軍は敗走し西軍は江戸、東北へ兵を進める。 4月 江戸城無血開城。 奥羽越諸藩は列藩同盟を以って会津藩への攻撃猶予を願う。 彰義隊は上野で新政府軍と戦い敗退。 9月会津藩降伏。
1869年	明治2年	龍雄は米沢で禁固の身みとなるも謹慎を解かれると興讓館の助教となる。 助教を2ヶ月で辞任し上京して新政府により集議院議員に任じられるも批判的言動が元でひと月足らずで議員を追われ東京に留まる。	5月 函館五稜郭宿落、土方歳三が戦死し榎本武揚ら降伏。
1870年	明治3年	龍雄の元には旧幕臣や戊辰戦争で敗れた者たちが大勢集まった。 その為東京芝の上行寺や円真寺の門前に「帰順部局点検所」を開き、脱藩者・旧幕臣に帰順の道を与えるべく嘆願書を新政府に提出する。 これが政府転覆の陰謀とみなされ、米沢に幽閉された後、再び東京に護送され 12月28日に小伝馬町牢獄で斬首刑に処され、首は小塚原刑場で梟首（晒し首）された。 享年27歳	(明治4年以降の日本の動き) 明治4年 岩倉使節団海外視察。 明治5年 西郷隆盛陸軍元帥となる。 明治6年 西郷 江藤 板垣 後藤 福島政府要職を辞任。 大久保利通は内務卿となり実権を掌握。 明治7年 佐賀の乱、江藤新平処刑。 明治9年 熊本神風連の乱 秋月の乱。 明治10年 西南戦争勃発。
その後		胴体は大学東校（東京医学校の前身）で解剖に使用されたが、首は密かに回向院に埋葬され、後に谷中霊園に移された。 明治22年恩赦により罪が解かれ、昭和5年の名誉回復の後米沢市の常安寺に祀られる。 この時、米沢では雲井会が設立され、常安寺本堂前に新たに墓が建立された。 その93年後の令和5年に雲井龍雄顕彰会有志により常安寺境内に雲井龍雄象が建立された。	

私の雲井龍雄

近藤 洋介 米沢市長



雲井龍雄は若くして才覚に溢れ、何が正しい道なのか、答えの無い混沌と激動の歴史の中で、自らの信念を貫き通してはかなく散った米沢の偉人です。雲井のように国を思い、道理を通して悪いことは悪いと言える姿勢は、今の時代にこそ求められる政治の姿ではないでしょうか。彼の短い生涯の中で残したものは、様々な形で継承されておりますので、これらを次の世代にもしっかりと引き継いでいくことが責務と考えております。

漆山 知道 常安寺住職

生まれた時から本堂の脇に大きなお墓があり、祖母から「雲井龍雄」と言う志士のお墓だと聞いていた。特に気にもとめずにいたが、ある日安部さんが雲井の墓前祭をしようと言ったときから40年近くがたち、境内に雲井の銅像が建った。雲井龍雄を慕う多くの方々の想いが銅像という形で実現したのだと陰ながら誇りに思う。



阿部 隆一 歴史春秋出版株式会社 代表取締役



戊辰の時、米沢藩士雲井龍雄は、会津と深い関係が生じている。幕末京都に米沢藩から出向いていた雲井は、会津藩士と深い関係に発展した。奥羽越列藩同盟の骨格も指導した。会津との関係は、会津田島を中心に活躍した。田島の人々も全面的に雲井を囲み、活動を資金面で支援している。

戊辰戦後の明治4年8月、雲井と数人の同行者が田島から尾瀬を抜けて沼田に向かう折、この尾瀬で「述懐」の一編の詩を残している。田島の人々は会津人に勝る日本を見る心に強く惹かれているのだ。

私の雲井龍雄

宍戸 宏郎 岳鷹会 会長

江戸時代末期から明治にかけての志士、壮志と悲調とロマンティシズムに溢れた詩人とも評されている。

雲井龍雄という名は、明治元年頃から用いたもので生まれが辰年、辰月、辰日、トリプル辰の日、十二支の辰「龍」を象徴し、龍の神である龍神は天に上るイメージから、金運や仕事アップと言われているので使用したのか、24歳までのことを深掘りしてみたい。



角屋 由美子 上杉神社稽照殿 館長



私は雲井龍雄実姉の六代の子孫です。彼は頭脳明晰、詩人としても著名で、文章力に秀でていました。そんなDNAは引き継ぎたかったのですが残念です。それでも歴史の学芸員をやっていますので、彼に対する根拠なき誤解や賛美ではない、史実の研究に努めたいと思います。江戸時代、安政の大獄の最後の犠牲者といえる吉田松陰、明治時代、新政府による最初の政治・思想犯として処刑された雲井龍雄。転換の時代を生きた彼の正しい評価が求められています。

佐藤 正三郎 米沢市上杉博物館 学芸員

上杉博物館では近年、雲井龍雄関連資料の収集が続いています。従来の収蔵品は17点ほどでしたが、2016年には龍雄の妻よしの実家である丸山家と再興された小嶋家から、2023年には龍雄の生家中島家の縁戚である新野家から、一括して資料をご寄贈いただきました。単発での収集も相次ぎ、当館所蔵の雲井関連資料は150点ほどに上ります。著名な「討薩檄」草稿をはじめ、雲井自筆の意見書や探索書、家族や同志とやり取りした手紙、熱い心情を詠んだ漢詩などがあり、なかには安藤英男『新稿雲井龍雄全伝』に未収録の史料も含まれます。

その一部は、2018年度「戊辰戦争と米沢」や2024年度「上杉茂憲」といった特別展で展示し、研究利用も増えつつあります。

さらなる調査研究と情報発信に努め、雲井の思想や行動の新たな一面を明らかにしていきたいです。



私の雲井龍雄

湯田 順一 元南会津町集落支援員

福島県南会津（館岩地域）では「恋の雲井龍雄」と題した物語を老婆が語り部として語り、レコード、掛け軸、短刀や、この地域の人々が雲井の活動資金として支援した贗金の原板も発見されるなど多くの足跡が残っております。

雲井龍雄は戊辰戦争で会津に味方し、南会津の農兵とともに戦ってくれた恩人です。（西軍をこの地域から追い払ってくれたのです）

ここ館岩地域には27の集落があり、高齢化率は50%を超えております。その中で、湯の花集落は雲井龍雄の言い伝えのあるところでした。

また贗金により財政支援を目論んだ証拠品「銅製の原板」が地元の寺院から発見され、「広報誌」に掲載、町の文化財に指定しております。



田中 杏樹 米沢出身女優 雲井龍雄広報大使



私は米沢出身で、大学卒業後山形県警に拝命し、現在は女優として活動しています。米沢市の観光大使や、雲井龍雄顕彰会の広報大使に任命して頂き、若者目線での広報活動を行っております。

雲井龍雄のことは初めはあまりよく知りませんでした。顕彰会の活動を聞いていくにつれ、幕末にこのような一途な若者がいたことに驚き、実際に龍雄のお墓がある常安寺に伺い、YouTubeでの発信を行いました。

米沢の偉人には直江兼続・上杉鷹山、また名誉市民の我妻栄博士などたくさんおりますが、こうした方々を「陽の人」とすると、雲井龍雄は「月の人」だと感じます。これから若い方々に雲井龍雄の良さをもっと知ってもらいたいと強く願っております。

青木 昭博 米沢市立図書館 副館長

龍雄に関わる思い出は、作家の故・吉村昭の取材。龍雄の解剖記録のコピーを携え、米沢市史編さん室に来訪したのは平成11年1月、高野長英、高山彦九郎に次いで3度目の調査であった。東大に残る解剖記録に日付はないが、吉村氏は12月28日は役所の御用納で26日の記録と推測、その確認調査であった。残念ながら関連資料は見つからなかったが、その年の「新潮」7月号に掲載の「梅の刺青」では、龍雄の処刑を26日と描いている。

（編集注：吉村昭の米沢市史編纂室を訪ねて高野長英のことを調査したことは吉村昭著「史実を歩く」に「全身を熱くした」と書かれている）



私の雲井龍雄

岡田 暁 東北芸術工科大学卒業
株式会社プライド・トゥで映像制作に携わる。

「雲井龍雄」まず、字面が格好いい。病弱で頭脳明晰、漢詩の達人…知れば知るほど主人公設定がすぎる人物。それが第一印象だった。

雲井を知ったのはYTS山形テレビで放送した「なんでだろう？ 山形深ボリ 幕末の米沢で義をたどる」の企画を考えている時だった。米沢藩は戊辰戦争で奥羽越列藩同盟の盟主として戦った。その最中、雲井は藩命を受けて江戸や京都で探索活動をする。要はスパイ活動だ。情報の精度が藩の未来を左右する激動の時代に、雲井は薩摩藩の謀略と不正義を目の当たりにして「討薩檄」を書き上げる。同盟軍にとってそれはバイブルのような物だっただろうと、九里学園の遠藤英先生は話してくれた。

明治3年、雲井は27歳で国家転覆を図った逆賊として梟首の刑に処される。以降米沢でその名を口にすることをタブーにしたとも取材をして耳にした。雲井が残したものは一体何だったのか…

三国志の英雄、曹操の詩に「老驥櫪に伏すとも、志千里に在り」という言葉がある。雲井の志もまた時代を越え、龍雲のように漂い続けている。

高岡 亮一 昭和22年生まれ、南陽市宮内在住。染物業。
米沢興讓館高校、岡山大学法文学部哲学科卒。

明治維新以降のわが国の失敗は、和魂洋才でいうところの「和魂の喪失」に尽きると言われます。雲井龍雄は激動の幕末最前線を「和魂」を以て駆け抜け、明治新政府によって見せしめのようにして、若き生命を絶たれました。

しかし自由民権運動の高まりの中で、遺された詩文によって龍雄の魂は甦ります。謙信公、直江公、鷹山公の流れを汲む龍雄の詩魂が日本人の心を揺さぶるのです。

生涯の師安井息軒の薫陶を受けた龍雄の志は、龍雄を慕う3歳下の曾根俊虎を通して広く世界に広がります。俊虎は龍雄の志を継いで、支那へアジアへと勇躍するのです。その流れは、「西洋的覇道」とは異質の、孫文の言う「王道アジア主義」に合流します。

戦後、田中角栄による日中国交回復実現の原動力となったのが、龍雄を敬愛してやまない木村武雄でした。いよいよ台頭著しい中国に日本人としてどう向き合うか。龍雄の「和魂」にあらためて目を向けるべき秋（とき）と思います。



私と雲井龍雄

銅像の制作を終えて

雲井龍雄銅像の制作を終えて、過去に亡くなった人物をバーチャルな世界ではなく銅像として、実像に迫る作品をどの様に構想し、作り上げていくのかを、雲井龍雄銅像作者の新井浩先生に製作過程をお話し頂きながら歴史の中の人物をどの様に現在によみがえらせて作品にしたかを、解説して頂きました。

(インタビュアー：雲井龍雄顕彰会・佐藤 剛志)



新井 浩

福島大学 人間発達文化学類 教授
国展会員
天地人「直江兼続、上杉景勝像」制作者

Q. 銅像制作のスタートは立体としてイメージされるのですか。

それとも二次平面のスケッチから始まるのですか。

A. 彫像を構想するときには、必ず立体として構想します。

どんなポーズにするかだけでなく、どんなバランス、ひねりや傾き、プロポーション、見せ場の優先順位、視線の誘導、ふさわしい大きさなどの形に関する課題や、周囲の環境との調和や働きかけ、時代性、観る人の興味関心や禁忌に関する課題などを複合的に判断します。

実際に構想に入るときは、まず描画から入りますが、立体的にイメージを把握し、上記課題もすでに意識して構想を進めていきます。

Q. 銅像は立像、座像、など無限の形があると思いますが、最初に決めるのですか。

A. 注文主さんとの打ち合わせでどのような像を望んでいるかを把握します。

立像は位置エネルギーが高く、緊迫感や動的イメージを元々持っていますし、坐像は安定感や静的なイメージを持っています。そうした像形式が元々持っているイメージに、注文主さんと打ち合わせて把握したイメージを重ねてふさわしい形を構想していきます。

Q. 銅像の材料や色に制限がありますか。

A. 銅像は青銅像、ブロンズ像ともいいますが、銅が85%、スズやその他亜鉛などを15%程度で配合した合金です。

もともと銅成分が多ければ赤銅色、銅成分が少なければ真鍮のような黄色に近くなります。銅像の着色は別の着色剤を塗り重ねることではなく、薬品で銅成分を酸化や還元させることで色味を変えます。屋外で10年以上何もしないで雨風に晒しておくと、やがて酸化し緑青色に変化します。何年かおきに洗浄して乾燥後に無光沢の透明ウレタンや同ラッカーをスプレー塗りやはけ塗りするのが専門的な管理法ですが、徐々に緑青色に変わっていくのもいいものです。緑青色になってからでも薬品処理で元の色にすることは可能です。色味にはある程度制限があり、渋めの色なら様々に発色させることができる鑄造業者を選びました。鮮やかな原色を薬品処理で出すのは困難です。

Q. 製作者として依頼者の意向を考慮することはありますか。

A. 真っ先に注文主さんの意向をお聞きし尊重します。しかしながら十分に意向を汲み取っても良いものができるとは限りません。注文主さんの意向を踏まえ、さらにそれを超える提案を像容、時代性、環境性を織り込んで提案することで、より良い作品となるようです。注文主さんからの意向には現れない隠れた願いや想いを汲み取ることは容易ではありませんが、それがより良い像につなげるコツです。

Q. 依頼者よりコストを決められるのですか。

A. もちろんコストを前提に最終的な作品は決定します。銅像制作を会社業務として扱う場合は作品の良さがコストを超えることはほとんどないと思います。例外は意気を感じて取り組んだ場合です。私はこの雲井龍雄像制作に私の技量を高く評価してくださって制作依頼をずっと以前からしていただきました。また、たまたま大学勤務の研究職であったため、依頼された仕事をコスト度外視で面白がって取り組んだため良い仕事できたと思っております。顕彰会さんには感謝しかないです。コストと作品の良し悪しの釣り合いをどう判断されるかは観る人の審美眼次第です。良さを求める人が多い土地はやはり良いものが集まると思います。

Q. 雲井龍雄の写真がありました、リアルに顔立ちを再現する銅像も考えられたのですか、また残された雲井龍雄の顔は丸顔で穏やかな表情ですが、敢えて決意をもった表情にされたのはどうしてですか。

A. 雲井龍雄の写真では顎が頑丈で口元が引き締まり、落ち着いて冷静な眼光の青年という印象でした。彫像では写真よりやや面長に見えるのは、志士として山河を跋涉した結果さらに頬がこけて、引き締まった顔立ちに見える像容を追求したためです。写真はリアルを表しているとは考えておりません。カメラを向けるとその人らしさが消えてしまうことがよくあるとお感じになりませんか？両眼で見ていたものはカメラの単眼では十分に表しきれません。さらに写真はその生活場面での、撮影された条件によって切り取られた、光の点の寄せ集めにしか過ぎません。雲井龍雄のリアルとは、必死になって国を考え、人を考え、自らのことを二の次にして活動したその活動場面にあると考えて、写真を元にさらに引き締まった顔立ちとしました。しかしながら作品を鑑賞する際は、作品の解釈は観る人の感じ方考え方に委ねられています。あの世の雲井龍雄が「こんな顔だったかな？」と苦笑いしていることを想像したとしても、鑑賞は全く自由ですので、いろいろなことを感じて想像してみてください。

私と雲井龍雄 —銅像制作を終えて—

Q. 制作過程において、その人物のどの年代の容姿とかをイメージするのですか。
又、その人物の思想、行動なども制作過程に影響するのですか。

A. 制作者によって異なるアプロートはあると思います。
私の場合は、その人物を表すのにたった一つの場面を切り取って表すのですから、どんな人柄で、何を考え、何を為して、どんな容貌容姿で、現代にどんな影響があったと考えるか、という点について情報収集し入念に検討を重ねているつもりです。
それを一つの場面で表すために、省略したり強調したり、抽象化したりより一層具体化したりして、まとめ上げていきます。制作者の数だけ異なる表現も存在しますが、この像の場合は鑑賞者が部分部分の表現の意味を考えることが出来るよう、たくさんの意味を込めたつもりです。

Q. 雲井龍雄の彫像を作るにあたり、人物をどのように考えられましたか。

A. 雲井龍雄は古今の詩想に触発されて熱くその生涯を生き、人間や世の中の在り様についての理想を胸にしながら現実に対応しようともがいた人のように考えます。
明晰な頭脳と言論活動で常に注目され、維新时期には交渉の最前線にいたために敵も味方も多い人だったように思います。享年27年はあまりにも早いですね。
あと20年生きていれば円熟味も増して世の中の仕組みづくりにさらに貢献できた人だろうということは、除幕式で述べた通りです。しかしながら27年の生涯は熱く、鋭く、激しく、深く、現在の私たちに生きることを強く問いかけています。そんな思いを像に込めたつもりです。残された雲井龍雄の写真は紋付を着ていることから、何らかの記念すべき事柄があって晴れ姿として撮影されたものと思います。そうした日は雲井の人生の中で穏やかな時間が流れていた日常、おそらくひと月ふた月単位の日々であったものと思います。穏やかな顔立ちはそのためであろうと考えました。
人間は心理的に厳しい局面では、一週間で眉間にしわが寄り、眉が逆立ちます。身体的に厳しい局面が続くと頬はこけ、肌は日に焼け引き締まります。身体つきさえ変わります。当たり前のことですよね。栄養状態は現代と異なって、邸宅に起居する写真撮影のころのような日々と、像に表したような旅路での日々では全く違う状態であったろうとは容易に想像つきます。そのような環境に置かれた状態をベースとして、さらに雲井龍雄の国を憂え、人の世をより良くしようとする決意を光る眼光に表したものです。

私と雲井龍雄 一銅像制作を終えて一

Q. 立像で右手は前に、左手は刀に置かれていますが、どのようなお考えだったのですか。

A. 雲井龍雄は明治維新の只中であって、いち早く剣から言論へとその力のよりどころの在り様に気づき実践した人だと思えます。剣に代表される武力の行使については寡聞にして存じませんが、討薩の檄や詩作に代表されるよう言論で世の中の変革を促そうとしたことは早い段階から認められます。

明治維新後に新政府から衆議院議員として任じられたのも、その言論の力が認められたからだろうと考えます。左手に持つ剣は後ろに下げ、右手は弁じたてる身振りを表すことで、雲井龍雄の生きた時代、その力量を表そうとしたものです。

Q. 制作にはどれくらいの時間がかかったのですか。

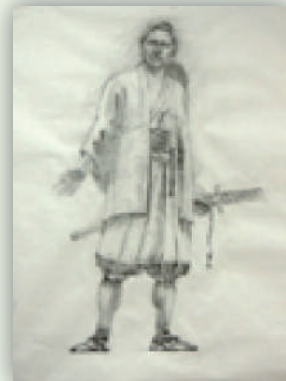
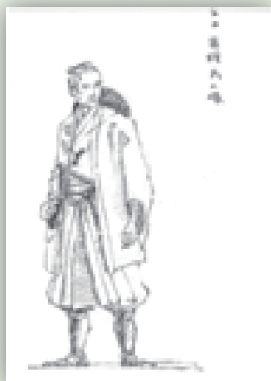
A. 最初に雲井龍雄像のお話をいただいたのは2004年だったでしょうか。少しずつ人物像を理解し、イメージを膨らませていきました。お話が本格化したのは2018年ごろだったかもしれません。イメージ画を四つ切り判で用意してご覧いただきました。

次いで2019年6月に雲井龍雄シンポジウム開催に合わせてA0判で2枚のイメージ画を用意し、そのうち一枚が現在の銅像と8割程度共通しています。しかしながら当時はまだ設置場所も決定しておらず、像以外にも様々な附属物を検討していました。

現在の設置場所に決定し、太陽の位置、おいでになる人が主にご覧になる位置等を考慮して現在の形となりました。現在の設置場所はいくつかの案をご提示いただいた中で最良の場所ですし、台座や背景の構造物もとてもマッチしていますね。

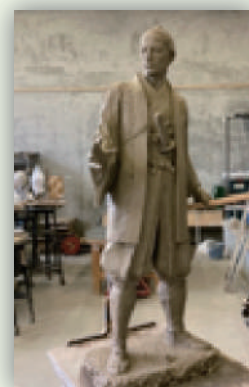
Q. 彫像制作の順序をわかる範囲で教えていただけますか。

A. 最初はさまざまな資料に触れて、人物像を把握し表現すべきイメージを構想します。次いで描画や小さな粘土で立体的な形をイメージしながら冒頭の1.で記した点を検討していきます。この時には人の姿を作るというより、部分部分が響き合い、強靭さや美しさを発する何らかの物体、というつもりでイメージしています。



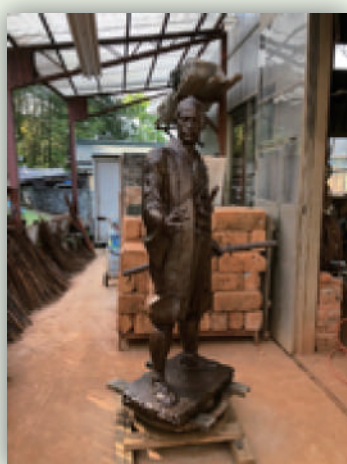
私と雲井龍雄 一銅像制作を終えて一

構想が固まると、粘土で造る塑造の場合は、木材、針金、シュロ縄を使って心棒を組み上げてから粘土で大まかな形から造っていきます。粘土の像でさらにさまざまに検討を加え完成に近づけていきます。



完成後は石膏で型取りします。粘土の外側に石膏を重ねて粘土を取り除くと凹型が出来ます。凹型の表面に離形剤を塗布した上で、内側に凸型を石膏（または樹脂）で流し込み、硬化した後に凹型を割ることで、粘土と同じ形の凸型が姿を表します。

石膏（または樹脂）から銅像（青銅像、ブロンズ像）に置き換える段階は石膏型取りと似た工程をとりますがさらに複雑です。この段階は専門の鑄造業者に委ねることとなりますので割愛します。



銅像となったのちは台座を担当する石屋と打合せ、転倒防止や盗難防止のためのしっかりとした心棒を像の内部と石材内部に通して設置像として完成します。

私と雲井龍雄 —銅像制作を終えて—

Q. 雲井龍雄像は完成後 2022 年秋に東京都美術館での国画会展覧会に出展され、設置前に広くお披露目されたと思います。来場者の感想などお聞かせください。

A. 国展彫刻部は実験展の色合いの強い展覧会です。その一方で芸術と現代生活の関係性を問い、結びつける運動を推進することが彫刻部の理念にうたわれています。

団体展と呼ばれる国展をはじめとする展覧会は、出品作家が自身の表現力を世に問うデモンストレーションの場で、様々な表現傾向の力作が出品されます。

秋の秋季展は春の本展以上に実験展の意味合いが強く、作品の傾向は多様に広がります。

そのような展覧会に雲井龍雄像（樹脂原型）は出品されました。

彫刻家仲間からはその表現力の高さが評判となり、作品前に何度も作家が集まり話題にする姿がありました。私も何度も声をかけられました。

来場者からはデモンストレーションとしての表現とは異なり、現実に恒久設置を前提とした像が出品されたことで、社会のダイナミックな動きを感じ取った様子をうかがうことが出来、こちらも作品前で感心される来場者が多かったです。



編集後記

編集長 上泉 泰（龍雄の友、上泉直蔵の玄孫）

雲井龍雄は戊辰戦争において薩摩の横暴を批判をしてきたが、明治になり興譲館助教から新政府機構の末端役人となった。末端ではあっても律儀に過ごし、少しずつ自分の理想を反映させる生き方もあったのではと思う。

しかし雲井龍雄という男に、それは出来なかった。いわれなき「賊軍」とされて殺されていった仲間を思い、生き残っても苦しみの中にいる同志を思い、議員を辞し新政府に異議を申し立てた。この結果明治3年12月に小伝馬町牢内にて斬首の刑を受けるに至った。

後世さまざまな人たちは、命を懸けて「義」に殉じた男がいたことを深い愛惜をもって心に刻んできた。これからの人たちにも龍雄の「義」を記憶し続けて欲しいと思う。

最後に「雲井龍雄の世界」は多くの皆様の寄稿や資料提供によりつくることができました。改めてお礼を申し上げます。編集は顕彰会のメンバーが、非力さを顧みず毎週集まって喧々諤々と意見を出し合っ行って、やっと作ることが出来ました。



2025年1月

協力 佐藤 正三郎 米沢市上杉博物館 学芸員

編集スタッフ	屋代 久	雲井龍雄顕彰会 (理事長)
	安部 三十郎	〃 (副理事長)
	上泉 泰	〃 (副理事長)
	佐藤 剛志	〃 (理事)
	遠藤 隆一	〃 (理事)
	伊藤 剛	〃 (理事)
	横山 昭子	〃 (理事)
	石原 誠	〃 (監事)
	内田 靖	〃 (監事)



雲井龍雄 肖像
(上杉博物館所蔵)

雲井龍雄の世界 憂国の士・魂詩人

編集発行

特定非営利活動法人 雲井龍雄顕彰会

事務局 〒992-0038 山形県米沢市城南 2-3-5 3

WEBサイト <https://kumoitatsuo.org/>

お問い合わせ info@kumoitatsuo.org

発行日

令和7年2月28日

印刷製本

株式会社 MO I N

令和6年度米沢市協働提案制度助成事業

※ 無断転載・複写を禁じます。



震井龍雄

